

Title	勝者の歴史言説と「反抗者」 : Mirror for Americansの2重の敗北
Author(s)	伊勢, 芳夫
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2019, 2018, p. 23-32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72730
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

勝者の歴史言説と「反抗者」

——*Mirror for Americans* の 2 重の敗北——

伊 勢 芳 夫

1. はじめに

「歴史」とは一体何なのか。事実を編年体で編纂したものと考えている人は多いだろう。あるいは、Hayden White のように「彼の物語 (his story)」にすぎないのだと考える人もあるだろう。もし「歴史」が後者、つまり勝者である「彼」によって書かれるものであるのなら、日本にとって第 2 次世界大戦の敗戦後、つまり「戦後」は歴史創作の根底にある「価値の源泉」とパースペクティブが劇的に変化した時期といえるだろう。なぜなら、日本は、天皇家が作り上げた「国造り」の歴史が支配する国であるのだが、第 2 次世界大戦における敗戦によって、日本の戦前・戦中の歴史の書き手はアメリカ人となったからである。

本論では、歴史創作を先導した主流のアメリカ人を取り上げるのではなく、反主流、いわば「反抗者」のアメリカ人女性、Helen Mears を取り上げる。彼女は戦争直前と終戦直後に日本にやってきて、¹ 戦前の日本をつぶさにみるとともに、GHQ の日本史の創作の過程を反主流の立場から客観的に眺め、*Mirror for Americans* というタイトルの本を著したが、その本で訴えた彼女のメッセージはアメリカ市民に認められることはなかった。

Mears が *Mirror for Americans* で訴えようとしたことは、以下の 2 つの引用に表れている。

The Occupation of Japan, in which Americans as a whole seemed only moderately interested, was the climax of an American demonstration of controlled power on such a vast unprecedented scale, and with such possibility for future disaster, that an American could only hope that those who had generated and controlled the power and had planned the routes were also, in fact, aware of the nature of the goal toward which they had pressed on with such overwhelming speed and force.²

¹ Helen Mears は、1925 年、1 年間の中国滞在中に 10 日ほど日本を旅行し、1935 年に 2 回目、そして 3 度目は GHQ の諮問機関の一員として 1946 年に来日した。2 回目の日本体験を基に Mears は、*Year of the Wild Boar: An American Woman in Japan* (Philadelphia and New York: J. B. Lippincott Company, 1942) を執筆している。

² Helen Mears, *Mirror for Americans: Japan* (Boston: Houghton Mifflin Company, The Riverside Press Cambridge, 1948), p. 2. 以下の *Mirror for Americans* からの引用は、この版の頁数を本文に記入。

At this moment, viewed from an army plane, Japan, like Okinawa, seems merely another American stepping-stone toward Asia. (p. 48)

アメリカから軍用機を何度か乗り継いで日本に向かう Mears は、アメリカの覇権が太平洋の西の端にまで伸びていることをつぶさにみる。将来の禍の大きなリスクを孕んだこれまでになかった広大な地域をアメリカのコントロール下におくことのクライマックスが日本占領なのだが、圧倒的なスピードと勢いでもって進んでいくその先にあるゴールの真実が何かに気づくアメリカ人がいることを、ただ願うことしかできないと述べている。

Mears は、イギリス人作家 Rudyard Kipling 同様、基本的には文化相対主義者である。そして Kipling と同じように、異文化に対して謙虚になることの必要性を感じているのであるが、文化が全く異なった国に旅行する者が、ややもすれば自文化と比較して低く評価する傾向があると述べ、³特にアメリカ人はその傾向が強く、彼女は以下のように、アメリカの「普遍的価値」を相対化する。

To assume, therefore, that what was good for Americans in America would be equally good for Japanese in Japan was a highly questionable procedure. (p. 39)

Traditionally American objectives, not only in relation to our own society at home, but also in relation to our foreign affairs, have been expressed in terms of “democracy” and “The American Way.” (p. 42)

アメリカ人にとって良いことでも、必ずしも日本人にとって良いことではないと Mears はいう。一方アメリカでは、国内だけではなく、“democracy” や “The American Way”が外国にとっても進むべきゴールになるという。

Since interpretations of history are bound to vary, depending on the point of view of the interpreter, it would be possible for the Japanese interpretation of the causes of the war to differ from ours and yet for both of us to be sincere in our beliefs. (p. 157)

Mears はこのような歴史観、文化観の下に、まずアメリカにおける日本表象を検証するのである。

2. 流通する「日本・日本人」イメージ

Mears は、満州事変以降、国家やメディア、学者がどのような「日本・日本人」イメージを作り出し、流通させていったかを検証する。

³ *Mirror for Americans*, p. 133.

For centuries the Japanese people, unlike their neighbors in the Pacific Basin—Chinese, Malaysians, Indians and Whites—have been students and idolators of the art of war and the warrior caste. (General Douglas MacArthur) (p. 112)

We were told that in their pre-modern period they built up “warlike ideals”; that they worshiped a “military caste”; that they have always been ruled by “military dictators”; that they worshiped their Emperor as a living “God of War”; and that their religion—Shinto—encouraged a belief in their racial superiority and commanded them to “conquer the world” so that their Emperor-God might reign over it. (p. 113)

Douglas MacArthur の「環太平洋の我々の隣人たち——中国人、マレー人、インド人、白人——とは違って、何世紀ものあいだ日本人は兵法を学び戦う集団に心酔してきた」という言葉を Mears は引用する。そして、日本人は、前近代に「好戦的な理想」を打ち立て、「武士階級」を敬い、ずっと「軍事独裁者」に支配され、天皇を「戦の神」と崇め、彼らの宗教——神道——は日本人の民族的優位を信じるように鼓舞し、天皇が世界の玉座につけるように「世界征服」を命じ、⁴満州事変がその始まりであると、彼女は教えられたという。そして、このようなアメリカ国内に流通する「日本・日本人」イメージから日本人は「文字通り死ぬまで戦う」ほどの「狂信的軍国主義者」であるという日本人観に基づいてアメリカの政策がつくられたのだと説明する。⁵その証拠に、事実上日本は戦争に負けたにも関わらずポツダム宣言の直後に降伏しなかったのは、日本人が「狂信的軍国主義者」であることの1つの証拠であると一般のアメリカ人は考えたのであった。⁶

それに対して Mears は、天皇を世界の玉座につけるように神道の神々に命じられて日本人は戦ったというのは、Paul Bunyan と Babe the Blue Ox くらいばかげた話だと一笑する。⁷また、軍国主義化が進んだのは 1938 年以降であり、戦争目的に国家総動員されるのは 1942 年になってからだという。⁸さらに彼女は、今回の戦争を通して、日本はアメリカを征服しようとしたのではない、むしろアメリカの方が日本を征服したのだという。⁹

このような「日本・日本人」イメージがアメリカ人の間で流通したために、日本兵を「人

⁴ Mears は、このような日本イメージの形成者の一例としてアメリカの歴史家 Hornbeck について、“In his indictment of Japan’s historic militarism, Mr. Hornbeck jumps rapidly from Hideyoshi, in 1578, to the Tanaka Memorial (which may have been a forgery) in 1927.” (p 127)と書いているが、ここで挙げられている田中義一のメモリアルは、1931年9月に The China Critic (50 Peking Road Shanghai, China)から英語訳が出版されている。このメモリアルは、1927年7月25日に当時の田中義一首相が昭和天皇に上奏したものであるという。

⁵ *Mirror for Americans*, p. 80.

⁶ *Mirror for Americans*, p. 104.

⁷ *Mirror for Americans*, p. 114.

⁸ *Mirror for Americans*, p. 95.

⁹ *Mirror for Americans*, p. 77.

間」とはみようとしなくなったのだと Mears はいう。

We have talked so much about this mysterious samurai that we have never bothered to look at the Japanese soldier as a human being. (p. 88)

3. 「日本」言説に対する「反抗者」としての Mears

2 節でみたように、アメリカで流通する「日本」言説に対して、Mears の対抗言説は、前述の Kipling の父親である John Lockwood Kipling がイギリス人の基準とインド人の基準を交差させることによりステレオタイプではないインド社会を描こうとした *Beast and Man in India*¹⁰ と同様の手法、つまり、アメリカからの視点と日本からの視点を対置し、それぞれの言説の偏りや歪みをあぶりだすことによって生み出そうとする。たとえば、太平洋戦争に至る過程での、両国の国内向けのプロパガンダとそれが国内世論を扇動し、戦争へと突き動かすプロセスを対比する。

1935 年に 2 度目の来日を行った Mears よると、当時の日本社会はラジオ、新聞、講演などで日本の危機をあおり、非友好的な列強によって「包囲されている」と警告、また、これまで西欧列強はアジアの同胞を苦しめてきたと非難し、国際連盟に対しては「白人クラブ」に過ぎないと喧伝するプロパガンダが日本中に充満していたという。¹¹

一方アメリカ国内においても、1938 年から 1941 年末の真珠湾攻撃まで、日本と同じような軌跡をたどったことを指摘する。否定的な日本のイメージ形成が起こり、それが宣伝流通されたのだ。Roosevelt 大統領は、1939 年に「限定的緊急事態」を宣言し、1941 年 5 月 28 日には「全面的緊急事態」を宣言した。歴史が歪められ、危機感はラジオ、新聞、講演などで焚きつけられ、国民をパニック状態に陥れた。「民主主義は包囲されている」という大統領による警告、日独伊三国同盟は「世界を征服し奴隷化しようとしている」という警告が、喧伝された。¹²このように、日米両国で、同じように自国の安全を脅かす大きな脅威に「包囲されている」という警告を絶え間なく流すことにより、国民をパニックに陥れ、戦争の全面協力を扇動していったという。

Mears はまた、日米両サイドから歴史を検証するだけでなく、日本軍に占領されたアメリカの植民地フィリッピンの住民や、マーシャル諸島の住民の視点も利用する。

During the war, even in the Philippines, where the record of native opposition against the Japanese was proof of Philippine confidence in American promises of freedom, there had been large numbers of individuals and groups who willingly worked with the Japanese conquerors in the comparatively quiet days following the first Japanese successes. (p. 25)

¹⁰ John Lockwood Kipling, *Beast and Man in India—A Popular Sketch of Indian Animals in their Relations with the People* (London: Macmillan, 1891).

¹¹ *Mirror for Americans*, pp. 3-4.

¹² *Mirror for Americans*, p. 4.

Nor could we even be sure that, from the Marshallese point of view, our rule must necessarily be preferable to that of the Japanese. (p. 26)

このように Mears は、アメリカのドミナントな「日本・日本人」言説に対して、多角的視点、バランスの取れた比較を通してそれを突き崩していこうとするのである。

4. 対抗言説のための戦略

3節でみたように、Mears は対抗言説として、アメリカと日本の言説に現れる同種の自己正当化の事例を挙げていく。その1つに「アジアの解放」がある。¹³アメリカが主張する「アジアの解放」とは、日本の植民地、及び日本が占領した地域の住民を解放することであり、一方、日本が主張する「アジアの解放」とは、欧米列強のアジア植民地から住民を解放することであり、占領後に少なくとも名目上は独立を認めていくのである。アメリカ人の居心地の悪さは、アメリカの方もフィリピンの独立を約束していたのだが、その他の西欧植民地宗主国はむしろ植民地支配を継続しようとしていることであつた。そのため、同盟国の植民地支配を隠ぺいする必要があつた。その意味で、「アジアの解放」のプロパガンダを掲げるアメリカと日本と、イギリス、フランス、オランダとはかなり温度差があつたと思われる。

さらに Mears は、ある歴史的事象をみればアメリカの日本批判は正しいと思えることでも、長いスパンで歴史的に、そして、世界的なパースペクティブから眺めるとき、その歴史的事象の解釈や評価はかなり変わって見えることを示そうとする。たとえば、日本はずっと「世界征服」を目指す「軍事独裁者」による支配が続いてきたという歴史観も、それに該当するのは豊臣秀吉しかいないと指摘し、その秀吉ですら当時の世界情勢に突き動かされていたという。

To assess Hideyoshi's activities accurately, as a soldier or a statesman, it would be necessary to remember that his was the approximate period of the Spanish Inquisition; the period of the bloody conquests of Peru and Mexico in which the Cross was a symbol as well as the Sword; it would be necessary to recall the violent slave trade and the bloody conquests of Asiatic territories and island kingdoms all over the world, which were a conspicuous feature of Western history during this period, and from which the Japanese withdrew into isolation. (pp. 129-30)

秀吉の生きた時代は、スペインやポルトガルを中心とした帝国主義の時代であり、十字架をかざし、奴隷貿易や侵略戦争をヨーロッパが世界中で展開していたことを思い出す必要があり、秀吉の死後、日本はむしろ鎖国政策をとつたのである。

¹³ *Mirror for Americans*, pp. 286-7.

確かに、開国以降日本は軍事侵略を拡大していったように見えるが、日本はあくまでも「合法的(“legally”）」に——つまり、いわゆる万国公法に則って——行ったのだと Mears はいう。

The Japanese, of course, secured the Chinese consent, by treaty, to the transfer of the continental Russian holdings, for the British had taught their young ally that these matters must be handled “legally.” These Chinese treaties formed the legal basis for Japan’s later demands in Manchuria. (pp. 192-3)

As a matter of record, Japan’s annexation of Korea had considerably more “legal” documentation than most of the empire-building of the Western Powers. (p. 196)

「満洲国」につながるロシアの中国領土の日本への移譲も、イギリスのアドバイスで中国から「合法的(“legally”）」に承諾を得たものであり、韓国併合も、西欧列強の帝国建設よりもより「合法的(“legal”）」であるという。

確かに、*Mirror for Americans* が書かれた当時の「今日」——そして文字通りの今日——から振り返れば、日本が朝鮮半島の人々を「隷属」したとみるのは容易いし、大韓皇帝の日本に併合を求める「請願」は軍事侵攻を隠す「法的擬制(“legal fiction”）」であるとみることも容易いだろう。¹⁴それでも、日本の行為は「合法的(“legal”）」になされたと Mears はいう。もっとも、彼女は日本の行為を正当化しようとしているのではなく、この「合法的(“legal”）」の持ついかかわしさを問題にしようとしているのであり、そもそもこの「合法的(“legal”）」という帝国主義にとって都合のいいツールは欧米社会から生まれたのだという。

Once the demands were granted, they were set down in a treaty, and that process not only made the whole business “legal,” but bound the weaker Power to “respect these treaty commitments” forever after, unless the weaker Power (or backward people) should gain a new status by performing some service for the stronger Power, or should itself become strong enough to demand equality. (p. 203)

The real enemy was not Japan; the enemy was the structure of Unequal Treaties [the Nine-Power Treaty] that gave Japan its “legal” rights in Manchuria, and without which Japan could not have carried out the Incident. Yet in condemning the Incident, we based our whole case on the charge that both China and Japan had endangered these treaties. (p. 219)

イギリスが 1903-4 年にチベット進攻を行ったのは、条約に違反しイギリスに無断でロシアと外交関係を持ったからという理由であった。このように欧米列強は非欧米社会と条約を

¹⁴ *Mirror for Americans*, p. 199.

結び、それに違反すると武力進攻を行ったのだ。日本はそれを見做っているだけで、逸脱していないという。したがって、満州事変に対して真に責めるべきは日本を含む列強にとって都合のいい条約である「9カ国条約」であって、日本ではないという。

このように「合法的(“legal”）」に行っている日本の軍事行動に対して非難を浴びせられるのは、日本の行動そのものではなく、日本人がアジア人であるからだ日本人が思うようになったと、Mears はいう。¹⁵ もっとも一方的な日本たたきではなかったと、Lytton 調査団報告を引用して指摘する。「共産主義者の悪党ども」や蒋介石の南京政府の「外国排斥」に対して中国もまた非難されたのであった。この日本非難だけではなく中国非難を、満州事変に対する非難の本当の理由が人道主義ではなく、中国における列強の既得権が侵害されたことにあることの証拠として Mears が挙げているのである。

The Lytton Report was extremely severe with the Chinese on two major issues; it found that “communist bandits” were a disturbing factor; and it found that the Kuomintang (the Chinese Nationalist Party, headed by Chiang Kai-shek, whose régime in Nanking was recognized by the Western Powers as the legitimate Chinese Government) was riddled with “anti-foreign” bias. (p. 224)

次に、Mears の対抗言説が生み出した「日本・日本人」イメージをみていこう。

4. 1. 西欧列強の「優等生」としての日本イメージ

Mears の対抗言説において、日本は西欧列強の「優等生」という表象形成が行われる。まず、日本の開国から説き起こす。

日本は中国においてと同様、不平等条約の下、西欧列強に特権的立場を認めることになる。しかしながら、この不平等条約の時期に、列強の直接の「指導(“guidance”）」の下、日本人は「再教育を受け改良されていく(“reformed and re-educated”」)。1899年、日清戦争の勝利により、日本は優秀な生徒として認められ、不平等条約を免除され、高校の卒業証書をもって大人の仲間入りをする。日露戦争の勝利によって、優秀な成績で大学を卒業し、第1次世界大戦によって大学院を修了するとともに、アメリカ、イギリス、フランス、イタリアと並ぶ最強国の一員として、平和を愛する「5大強国(“Big Five”）」の一員として認められたという。¹⁶このように、満州事変までは、日本は「優等生」であったのだ。しかしながら、満州事変以降、日本人は「世界征服」を企み、「文字通り死ぬまで戦う」ほどの「狂信的軍国主義者」にされていく。たとえ日本人が「自分たちのイデオロギーは、アジア、太平洋、南洋、そしてアフリカの先住民に西洋文明と統治機構を付与するという『白人の責務』に対する論理的で必然的な模範解答だ」と主張しても無駄なのである。¹⁷したがって、日本の敗戦後のGHQの占領政策においては、以下のことが基本方針となる。

¹⁵ *Mirror for Americans*, p. 230.

¹⁶ *Mirror for Americans*, pp. 170-1.

¹⁷ *Mirror for Americans*, p. 120.

From our point of view we are reforming institutions—that are both inherently warmaking and uniquely and traditionally Japanese—in order to change them into institutions like our own that are, we assume, inherently against war. (p. 117)

これに対して Mears は、占領政策において改革されるのは「日本の伝統的文明(“Japanese traditional civilization”）」ではないと異議を唱える。

Instead, the reforms are aimed at modern Westernized Japan—at the institutions that developed after 1853, as a direct result of Japan’s first experience of “Occupation and Reform” by the Western Powers who today accuse her of traditional aggression. (p. 118)

つまり、GHQ の日本・日本人の改造計画で再教育しようとしているのは、開国前の日本・日本人ではなく、開国後の「優等生」としての日本・日本人であるというのである。Mears にとって、「教育者」の教育方針とは、“The first step for “educators” is to discover how well their practice squares with their principles from the point of view of those they seek to educate.” (p. 183) であるという。

4. 2. 経済的「弱者」としての日本イメージ

Mears は、日本の「狂信的軍国主義」イメージについて歴史的な観点から分析を行ったが、日本の「世界征服」、したがってアメリカにとって日本との戦争は防衛戦争というプロパガンダに対しては、経済面から切り込んでいく。

戦前の日本の軍事や産業について、以下のように説明する。

Japan, in 1931 and 1932, was in an extremely vulnerable position. An island kingdom with few native resources of the sort essential to a modern military machine, she was dependent—not only for her military supplies but for her very life—on markets and materials controlled by the United States, the British, Dutch, and French Empires. (p. 262)

明治時代以降の殖産興業により、日本の人口は急激に増加し、食料を日本の植民地や外国からの輸入に依存する割合が高まった。また、世界恐慌や大災害に加えてアメリカの日本人移民制限により、過剰人口を抱えた農村部は疲弊していく。そして資源や武器については、ほとんどを欧米列強やその植民地に依存していた。そのような国情において、日本が「世界征服」の野望を抱いたとみるのは不合理であると Mears はいう。

そのような日本を取り巻く世界情勢、そして日本人の視点を考えたとき、日本の中国大陸への軍事侵攻とその止むことのない拡大路線は、日本の政策集団が「白人」から差別的

な扱いを受けていて、貿易において競合する列強からアジアや太平洋で「包囲」され、列強がその気になれば貿易を完全に遮断してしまうと心から信じていたことが主要因であったと考えざるを得ないという。¹⁸そしてその完全「包囲」は、「ABCD 包囲網」によって現実となったのである。

このように、日本をアメリカにとってとてつもない「脅威」であるという日本イメージに対して、経済的「弱者」としての日本イメージ形成で対抗していくのである。

4. 3. ダブルスタンダードとしての占領政策

Mears は、過度の日本贖戻から *Mirror for Americans* を書いたのではない。アメリカにおけるダブルスタンダードに対する批判と、それが世界に不平等や戦争をもたらしていることをアメリカ人読者に理解させようとしているのである。

まず、アメリカ人からみて、アメリカの対外政策の目的は「人道的で、平和的で、合法的」であるという。¹⁹しかしながら、実際は人種差別的であり、白人の「特権」を手放そうとはしていないと Mears はいう。²⁰さらに、日本軍の大陸進攻を批判し、日本の「国際条約」の違反を懸念するというが、「国際条約」とはすなわち満州や中国における利権のことなのだと言っている。²¹そして、日本の「世界征服」に警鐘を鳴らすのは、列強のアジアへの軍事的拡張主義を隠ぺいする「意図的な装置(“a deliberate device”）」ではないのかと Mears は推察する。²²また、天皇を「戦の神」と崇め、世界の玉座につけるために死を賭して戦うことに対しては、イギリスでも同じように国王のために国民が戦場に行くことが忠誠の証であるとされている。しかし、それにアメリカ人は何ら批判をしないという。²³

日本の大陸侵攻に対するアメリカ政府の非難についても彼女は疑問を呈する。もし本当に非難するのなら、どうして満州事変の後もアメリカや同盟国は日本に武器や原油を輸出していたのか。ABCD 包囲網を引くまでは、むしろ対日貿易は増加していたのではないか。もし武器や石油の対日輸出を制限していたのなら、日本が日中戦争を継続することはできなかったろうし、対米戦争などできるはずはない。そもそも中国に対する不平等条約をアメリカや他の列強諸国が撤廃していれば、日本の戦争の大義は成立していなかったであろう。²⁴日本側も、アメリカの「二重政策(“dual policy”）」に疑心暗鬼になったという。結局のところ、日本が「始めた」のではなく「模倣」した行為の「スケープゴート」にされたというのだ、たとえ意図的でなくとも。²⁵

¹⁸ *Mirror for Americans*, p. 251.

¹⁹ *Mirror for Americans*, p. 168.

²⁰ *Mirror for Americans*, p. 33.

²¹ *Mirror for Americans*, p. 60.

²² *Mirror for Americans*, p. 164.

²³ *Mirror for Americans*, p. 116.

²⁴ *Mirror for Americans*, p. 263.

²⁵ *Mirror for Americans*, p. 258.

5. おわりに

第2次世界大戦後、GHQの諮問機関の一員として日本にやってきた Mears は、イギリスや日本にとってかわりアメリカが東アジアの覇権を握ったことをみてとった。そのような覇権主義に孕む危険と欺瞞性を危惧した彼女は、日本を「狂信的軍国主義」に駆り立てた本当の原因を明らかにすることによって、アメリカの大義や、それに基づく対外政策に潜む帝国主義的側面をアメリカ人の読者にわからせる必要を感じたのであった。それに気づかないでこのまま突き進めば、やがてアメリカも日本のように、世界中から非難されることになるであろうと、彼女は警告したのだ。

一部の無私な心でもって進歩的な行動をする個人がいるとしても、閉鎖社会の「扉を開け」、「遅れた地域を発展させる」政策の背後にある「主たる推進力」が「人道主義」であるとする考え方を、その政策が行われる地域の「住民たち」が受け入れることなどなかった、いやそれどころかその政策は、アジア人や植民地の人々にとって、ヨーロッパで行われたなら「全体主義」と非難されるものと大差のない政策であると Mears はいう。²⁶もし少数の既得権を優先し続けるのなら、アメリカ大陸やフィリピンの人々が合衆国に抱いていると考えている人気などあてにはできなくなるだろうという。

このような警告を発した Mears であるが、アメリカ市民からほとんど理解されることはなかった。絶大な優勢言説に対しては、彼女の対抗言説など所詮風車に立ち向かうドン・キホーテでしかなかったということだろう。そして彼女の徹底した複眼的な視点は、勝者であるアメリカ人ばかりか、敗者の日本人からも、またポストコロニアルの研究者からも理解されないのである。たとえ第2次世界大戦後から今日まで繰り返し起こる数多の悲劇、朝鮮戦争、中国人民解放軍によるチベット侵攻、ベトナム戦争、9.11同時テロ、イラク戦争等、数限りない難問の解答のヒントを Mears が我々に提供してくれているにも関わらず。

Mears は皮肉交じりに GHQ の日本占領政策について以下のように書いている。

What we are doing in Japan is to make democracy and punishment synonymous. We have given the Japanese a fifth freedom—freedom to starve. We can call this democracy if we wish. (p. 260)

²⁶ *Mirror for Americans*, pp. 198-9.